２どこでもないところで（河野裕子）

――小学校時代の下校時は、楽しいものだった。……

　友だちとふざけたりして遊び遊びしながら帰るのも、一人でゆっくりよそ見をしながら帰るのも楽しかった。一人のときは、学校からひとつの石ころをずっと家まで蹴りながら帰ったりすることもあった。

　学校から家まで子供の足で、三十分ほどかかる。その二キロほどの道のりを、石ころひとつとつき合って帰るのだが、これがけっこう時間がかかる。思わない方向に飛んでいったり、溝にはまったりすると、ジグザグに歩いたり、まわり道をしたりすることになる。そしてそういう、①めんどうくさいことがつまりは楽しいのであった。めんどうくさいことには、［　Ⅰ　］というオマケがついていて、石ころが落ちた溝のウホネや水藻のあいだには、ヤゴやミズカマキリが居る。それを草の先っちょでつついたり、水の中をのぞきこんだりする。タニシをひっくり返したりころがしたりして遊んでいるうちに、［　Ⅱ　］のことなど忘れてしまう。

　そういうよそ見という道草をしていた時間は、今から思えばずいぶん長い時間であったように思うし、子供の感覚からいってもやはりとても長かったような気がする。実際の時間はほんとうは、十分くらいのものだったのだろう。

　時間とか感覚といえば、私が初めて既視感というものを経験したのも、道草の途中であった。菜の花の咲くころのさがり、白く乾いた農道にぼんやり立っていた時、ふと何ともいえないなつかしいような妙な気分と感じがし、しばらくあたりの景色を見まわしていたことがある。

　いつともしれないいつか、けれど、確かに今という時間のようないつか、こんなにぼんやりとした白い農道のこの曲がり角に私は立っていた。そして、今目に見えているように菜の花の畑にかこまれ、雲は鈍く光り、空気が希薄でなま暖かかった。同じようなことがいつか確かにあった。けれどそれがいつだったのか、どうしても思い出すことができない。

　その後私は幾度となく②既視感を感じることがあったが、小学校一年生のときのあの［　Ⅲ　］の午さがりの道草のときのことが、一番鮮明である。道草をしているとき、一心に何かに集中しているが、こころはどこかほどけている。そういうこころの状態が、ふだんとはちがう感覚を呼びこむのかもしれない。

③おとなになるに従って、人はこころがほどけたような道草をしなくなってゆくのかもしれない。道草のあの長く無為な、しかしふしぎに楽しい時間。それはおそらく、道草というものが用意されたものではなく、ふとした偶然のものであり、意味づけの要がないものなのだからであろう。子供は、道草の意味など思いもしないで、道草だけをする。

＊語注

＊コウホネ…スイレン科の水草。

問１　――線部①が具体的に書かれている部分を文中から二〇字で抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問２　［　］Ⅰ・Ⅱに入る三字のことばを、それぞれここまでの文中から抜き出して答えよ。

Ⅰ＝〔　　　　〕　Ⅱ＝〔　　　　〕

問３　―線部②について、小学一年生のときの印象的な体験の感覚について、五〇字程度で具体的にまとめよ。

〔

　　　　　　 〕

問４　［　］Ⅲに入る季節を漢字一字で答えよ。

〔　　　〕

問５　―線部③について、筆者がそのように考える理由を簡潔に記せ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 〕

問６　右の文章の題名として、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　子供　　　イ　よそ見　　ウ　道草　 エ　既視感　　オ　おとな

【解答】

問１　ジグザグに

問２　Ⅰ＝よそ見　Ⅱ＝石ころ

問３（例）何ともいえないなつかしいような妙な気分と感じがし、初めてなのに同じことがいつか確かにあったと思った。（50字）

問４　春

問５（例）おとなは道草の意味を考えるから。

問６　ウ

ポイント

問２　石ころを蹴りながら帰るうちに、「石ころ」を忘れて、「よそ見」という道草をし始める。

問４　「菜の花の咲くころ」の思い出が語られている。